

北新町遺跡出土の「東大寺」刻印瓦について

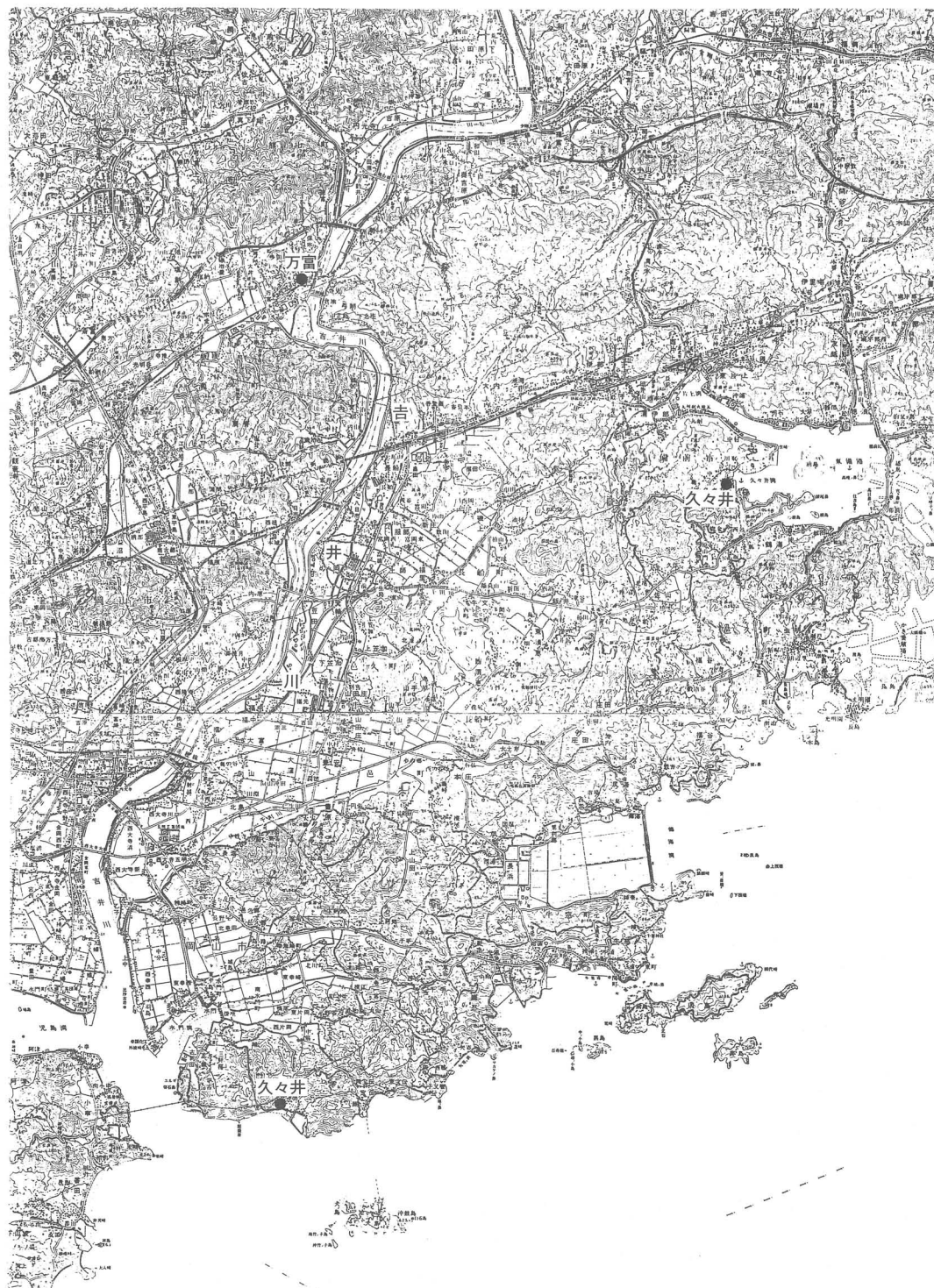
1. はじめに

北新町遺跡の第Ⅲ期調査(M区)では、「東大寺」の刻印の入った平瓦が1点出土している。⁽¹⁾この瓦は、平安時代末(1180年)に平重衡の南都攻めにより焼失した東大寺再建に⁽²⁾関連して、鎌倉時代初期に、岡山県瀬戸町にある万富瓦窯で製作されたものである。この瓦窯の操業には、当時東大寺再建のため大勸進職に任ぜられた俊乗坊重源が深く関与していたとされている。同調査においては、この他にも刻印はないものの、瓦の凸面に施された菱形のタタキメの文様が酷似する平瓦の破片が、数点出土している。ここでは、これらの瓦について簡単ではあるが、若干の考察を行いたい。

2. 万富東大寺瓦窯とその瓦について

万富東大寺瓦窯は岡山県赤磐郡瀬戸町万富に所在する。東大寺瓦窯の所在する瀬戸町は岡山県の南部に位置し、周囲を山々で囲まれるが、北接する熊山町には旧山陽道が走り、町東部には吉井川が南流し瀬戸内海に注いでいる。東大寺瓦窯は南流する吉井川が西へ蛇行している万富地区(古くは梅と呼ばれていた)の南北に伸びた標高約20mの尾根上に所在する。古くから「東大寺大佛殿」の銘のある軒瓦類⁽³⁾や「東大寺」の刻印のある平瓦の出土が知られており、国史跡に指定されていたが、窯の基数、位置、規模、形態等についてはほとんど知られていなかった。しかし、昭和54年に岡山県による磁気探査と発掘調査が実施され、⁽⁴⁾指定区域内において13基の窯跡が確認された。窯の構造はいずれもロストル式の平窯で、規模は幅1.2m、1.5m、2.5mの3種類があり、2条ないし3条の分焰牀を持ち、焼成室の長さは約3mと推定されている。分焰牀は平瓦と粘土を交互に積み重ねて構築していた。この調査ではコンテナ50箱にのぼる大量の瓦の出土が報告されているが、出土したのは平瓦のみで軒瓦類は出土しておらず、軒瓦類を焼いた窯は別に存在するものと推定され、瓦の種類によって窯が分けられていたようである。

ここで焼かれた平瓦の特徴は、大きさで言えば幅35cm、長さ42cm、厚さ2.5cmを測り、凸面に施された菱形文或はそれに横線や縦線を配した幾何学的文様のタタキメ⁽⁶⁾と凹面は板状工具よるケズリやナデが施され、「東大寺」と陽刻された刻印を持つことである。刻印は縦50mm、横20mm程の隅丸長方形で、外郭に1重の突線を巡らして、その中に「東大寺」の銘を陽刻で配置する。但し刻印はすべての平瓦に施されているわけではなく、刻印のないものも存在することが報告されている。⁽⁷⁾それでは次に北新町遺跡で出土した瓦について見ていくことにする。

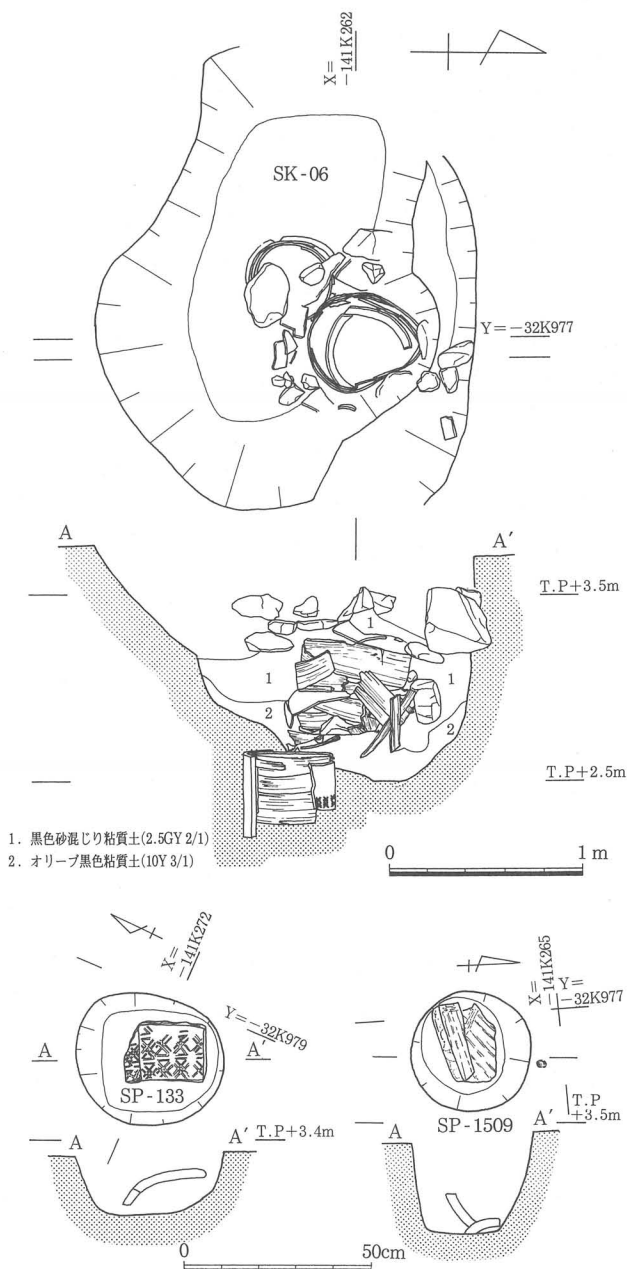


第89図 万富東大寺瓦窯位置図

3. 出土状況

まず瓦の出土状況であるが、瓦が出土したのは、M区で検出した中世の遺構面においてであり、井戸であるⅢ・SK-06、とピットⅢ・SP-133 (1436)、Ⅲ・SP-1509、Ⅲ・SP-1515のいずれも遺構からの出土である。同一面では井戸や土坑、溝等ともに、多数のピットが検出されており、11～13世紀頃の集落跡と考えられている。

Ⅲ・SK-06は、平面形2×2.5mの楕円形に近い不定形を呈し、深さ約1.3mを測る井戸である。井戸の構造は、最上部に割り石が残っていたので、石積みによる井戸側であったと考えられ、井筒として底部を欠く常滑大甕を転用し、その上に大型の曲物側板を載せ、甕の内部にも曲物側板がある。その下にはやはり水溜め用の曲物を置き、その外側に3枚の平瓦を曲物に密着させる状態で囲んでいた。甕と下部の瓦の位置はズれているが、甕内部の曲物と平瓦の内側にある曲物の径の大きさは一致するので、元来は一つの井筒として機能していたものと考えられる。この3枚の平瓦の一つに「東大寺」の刻印が入っていたが、同時に使用されていた他の2枚の平瓦も刻印は認められないものの、凸面の菱形の



タタキメがよく似ており、同様のものと考えられる。遺構内から出土した他の遺物には土師器皿、東播系須恵器鉢、瓦器鍋等があり、常滑甕と合わせて13世紀前半頃の時期を示している。

Ⅲ・SP-133 (1436) は平面形0.4×0.5m、深さ30cmを測るピットで、平瓦が凸面を上にした状態で出土しており、礎板に転用されていたものと考えられる。

Ⅲ・SP-1509も径約0.3m、深さ40cmを測るピットで、平瓦の破片2枚が凹面を上にして重ねた状態で出土しており、やはり礎板に転用されていたものと考えられる。2枚の破片は同一個体で、接合することができた。

また、Ⅲ・SP-1515からも菱形のタタキメが施される平瓦が出土しており、礎板として使用されていたものと考えられる。

このように出土した瓦は、井戸の施設の一部やピットの礎板として転用された状態で出土している。

4. 出土瓦

1～3はⅢ・SK-06からの出土である。1は約3分の2の残存で、凸面に菱形文に横線が菱形の交点で交差するタタキメが施されており、⁽⁸⁾凹面は板状工具によるケズリ或いはナデが施されている。凹面上部には「東大寺」の刻印がある。刻印は陽刻で、縦約cm、横約cmの隅丸長方形を呈し、外側に1重の突線が巡り、その中に「東大寺」の銘を配置する。2はほとんど完形で、凸面の文様は1と同様であるが、それに縦線が⁽⁹⁾加わる。刻印は見られなかった。3は破片で、1と同様凸面に菱形文と横線が菱形の交点で交差するタタキメが施されている。破片部分には刻印は見られなかった。4はⅢ・SP-133 (1436) 出土で、凸面に菱形文と横線が交差する2重線のタタキメが⁽¹⁰⁾施されている。5はⅢ・SP-1509出土で、4と同様に2重線のタタキメが施されているが、菱形の形状が横長である。6はⅢ・SP-1515出土で、凸面に菱形文と横線が菱形の交点で交差するタタキメが施されている。このように1以外には「東大寺」の刻印は見られないものの、凸面に施された菱形文に横線を配するタタキメの文様と凹面に板状工具によるケズリあるいはナデを施す特徴から、万富瓦窯産の東大寺瓦であると考えられる。

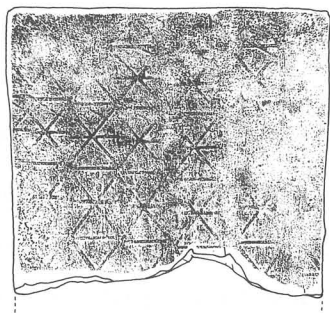
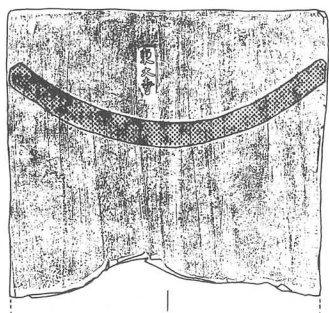
5. 東大寺再建と重源

1180年(治承4)に焼失した東大寺の再建計画は、1181年(治承5)に藤原行隆が造仏・造寺長官に任ぜられ開始されるが、と同時にその年の8月(改元により養和元年)俊乗坊重源が造営大勧進職に任ぜられた。重源の出自については紀氏或いは当時淀川河口の大坂

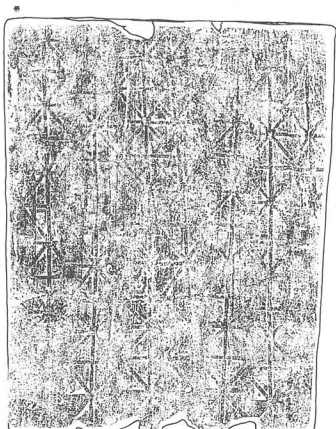
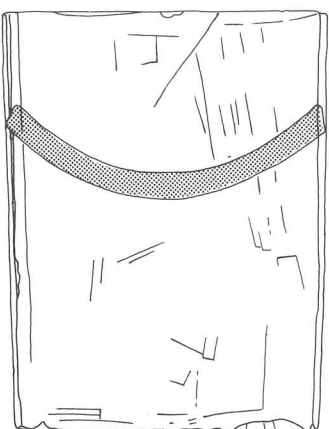
(SK-06)



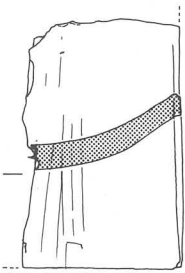
「東大寺」刻印



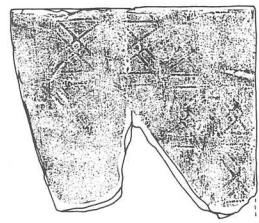
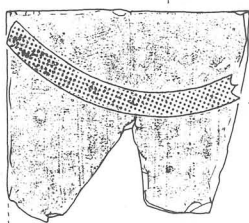
(SK-06)



(SK-06)

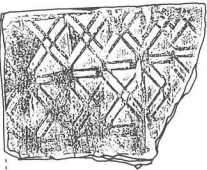
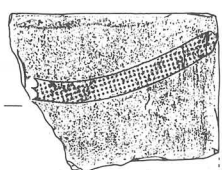


(SP-1509)

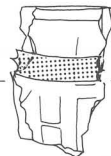


0 10cm

(SP-1436)



(SP-1515)



第91図 東大寺瓦実測図 註(1)より作成

湾に面した港であった渡辺の津を本拠地とした武士団である渡辺党の出身とも言われているが、確かなことは不明である。13歳で出家し醍醐寺に入り、後高野山でも修業をし、その頃から高野聖として社会的作善を行っていたと考えられる。重源は自分が行なった作善を書き留めており、これは『南無阿弥陀仏作善集』として今日も残っている。

大勧進職としての重源は、東大寺再建のため諸国を勧進したほか、周防国が東大寺造営料国となると、国司に任ぜられ木材の伐採や運搬に努力した。また1193年（建久4）備前国が東大寺造営料国になると、1196年（建久7）にはそれまで東大寺燈油田として点在していた荒地を開発して、野田保（現在の岡山市野田あたり）と交換したり、邑久郡長沼庄、神崎庄の開発に関与した。また、これとは別に重源が行なった作善の中で備前国に関連するものを挙げると

- ①大仏や仏像の修復の数、播磨国一駄、備中別所一駄、備前常行堂一駄、備中庭瀬一駄
 - ②吉備津宮に鐘を施入
 - ③備前一宮常行堂を建て、丈六の阿弥陀仏を施入
 - ④備前国府の近く（湯迫）に大湯屋を立て、田三丁、畠六丁をその費用に充てる
 - ⑤豊原御庄（邑久郡）内に豊光寺と湯屋を立てる
 - ⑥此外国中諸寺の修造凡そ廿二所
 - ⑦備前国船坂峠（備前市三石）を開き、往還人の難儀を救う
- などがある。

そして『南無阿弥陀仏作善集』の裏文書である作善集紙背文書の中に吉岡郷の地名が見られ、これは瓦窯の存在する瀬戸町万富地区のことを指している。その内容は

（朱書） 「官アミダ仏」

吉岡郷真依納沙汰四十二石二斗五升八合

津納三十六石九斗二升六合

とあり、さらに瓦に関しては

御瓦用途九百七石七斗二升

御瓦運上雑用六百八十六石三斗四升四合

除新田庄卅石定

吉岡御瓦 納二百二十一石三斗七升六合

（鑄）

鼓物師河内権守是助百七石

合百石 船賃并雜用七石

白土運上雜用五十一石七斗六升六合

倉残麦百十六石五斗四升四合内

梶取安清御瓦雜用請懸

御瓦

魚住梶取清房雜用請懸

右太略注進如件

建仁三年七月 日

惣判官代藤原 (花押)

の記事で、ここでいう「吉岡御瓦」とは東大寺瓦のことであり、この内容からすると備前国が東大寺造営国料となった建久4年(1193)からこの建仁3年(1203)までの少なくとも約10年間は、万富で東大寺瓦が焼かれていたことになり、その運営には重源が深く関与していたと推定されている。

6. 生産地及びその周辺での出土状況

それでは何故万富産の瓦が北新町遺跡で出土したのか。先述のとおりこの瓦は東大寺再建のため焼かれたものであり、通常の瓦とは異なりその使用目的が明確にされているものである。それ故北新町遺跡のような集落跡から出土することにはそれなりの理由、歴史的背景があったものと考えられるのである。これを考える前に生産地である岡山県万富及びその周辺での瓦の出土状況がどうであるか、過去において採集されていたものが知られているので、ここではこれらの瓦について触れておきたい。

東大寺瓦出土地

- (1)瀬戸町吉井川倉治沖
- (2)瀬戸町寺見御堂山下三角岩の深淵(吉井川内)
- (3)瀬戸町久津山麓
- (4)瀬戸町多田原阿保田神社境内
- (5)瀬戸町鍛冶屋天皇山山頂
- (6)瀬戸町大井西池
- (7)瀬戸町万富上の山番神堂境内
- (8)岡山市一宮字山神吉備津宮常行堂跡
- (9)岡山市湯迫浄土寺

(10)岡山市福島

(11)和気町安養寺

(12)熊山町弥上本土井

(13)熊山町可真下土井谷

(14)佐伯町矢田部天満神社

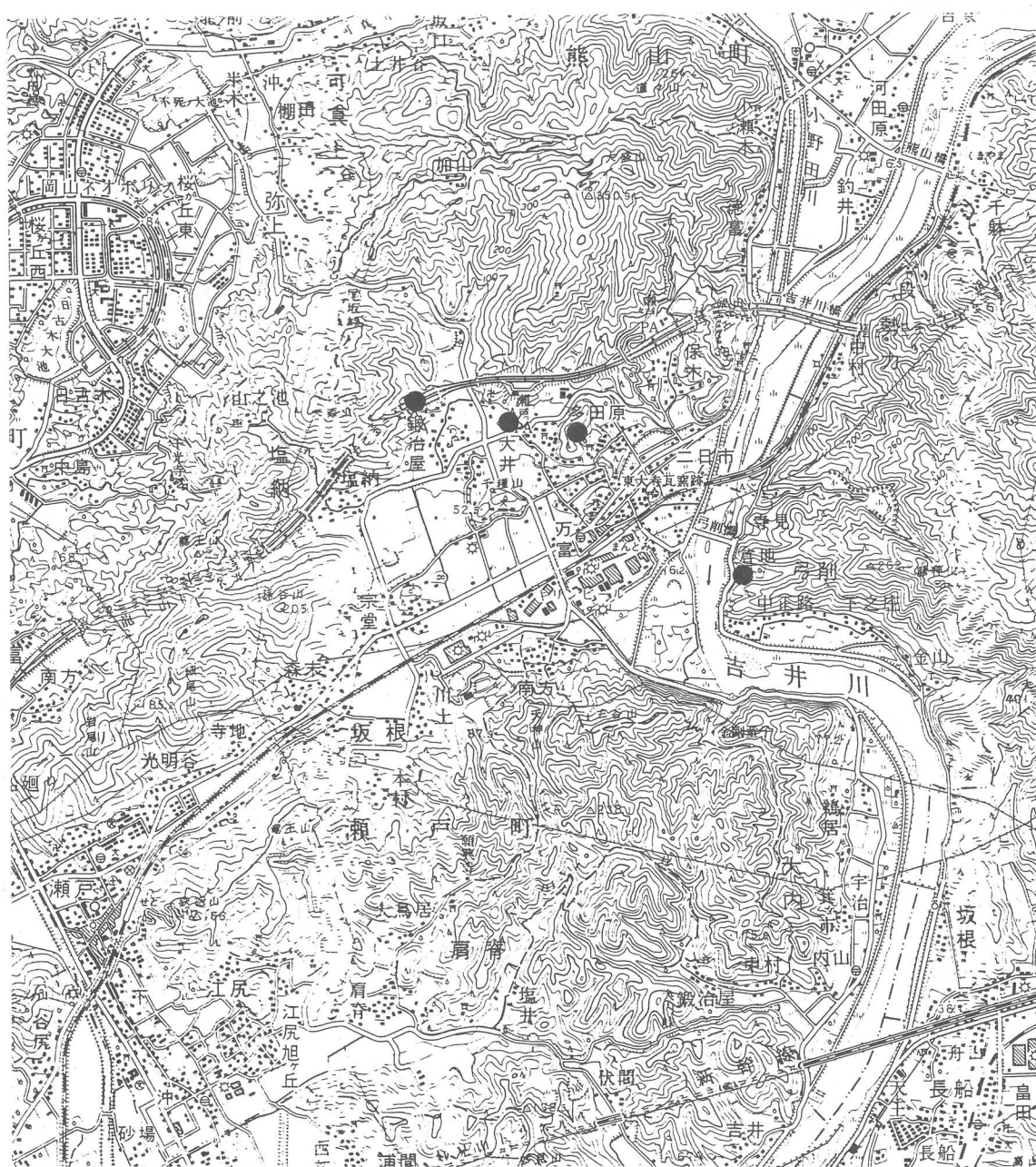
これらの出土地点を見ると(1)～(7)までは瀬戸町内であり、その内(1)(2)は、いずれも窯跡のある場所から東南約800mの吉井川の河川内である。(1)では河川内で砂利採集中に水面下約8mの所から揚がったとされている。ほとんどは軒丸瓦で、平瓦は少量の破片のみであった。(3)～(7)は窯跡の存在する尾根或いはその周辺の山裾であり、未発見の窯跡の存在を示唆する資料と言える。(8)は作善集に記載のある所で「東大寺」の刻印のはいった瓦が出土している。(9)も作善集に記載のある寺である。湯屋も建てられていて、寺域内から「東大寺」の刻印の押された瓦片が出土している。(10)は江戸時代の寛文年間中に漁師の網に掛かって揚がったものと伝えられ、現在は東大寺に収蔵されているものである。(11)は吉井川の上流にあたる和気町内で、安養寺にはかつて常行堂があったと伝えられることから、重源に関わりのあった寺と考えられる。(14)もさらに吉井川を遡った場所になる。(12)(13)は北接する熊山町内からで、窯跡が存在する場所や、(3)～(7)の瓦が採集されているのと同じ熊山山塊の山裾にあたる。

このように窯跡の調査からの出土品以外はいずれも採集遺物であり、北新町遺跡のように調査で且つ、他の使用目的での出土は今のところ例を見ない。

7. 東大寺での使用状況

消費先の東大寺ではどのように使用されていたのであろうか。ひとくちに東大寺再建と言っても壮大な計画で、重源一代では完成せず、二代栄西、三代行勇へ引き継がれていった。しかし、大仏殿、南大門、阿弥陀堂などの中軸部分は重源が完成させ、塔、戒壇院、中門は栄西が造ったことになっている。

このとき再建された大仏殿は、その後永録10年(1567)に再び戦火をうけて炎上している。⁽¹¹⁾ただ昭和42年に鐘楼部分の修理工事が実施され、使用されていた平瓦に菱形のタタキメと「東大寺」刻印が確認されており、万富で焼かれた瓦が大仏殿のみならず、他の伽藍にも使用されていたことが言える。⁽¹²⁾それは大仏殿の完成が建久5年(1195)とされており、紙背文書に書かれた「吉岡御瓦」の記事が建仁3年(1203)であることから、大仏殿完成以後も万富の地で瓦が焼かれていたことから推測される。となると再建全体に要した



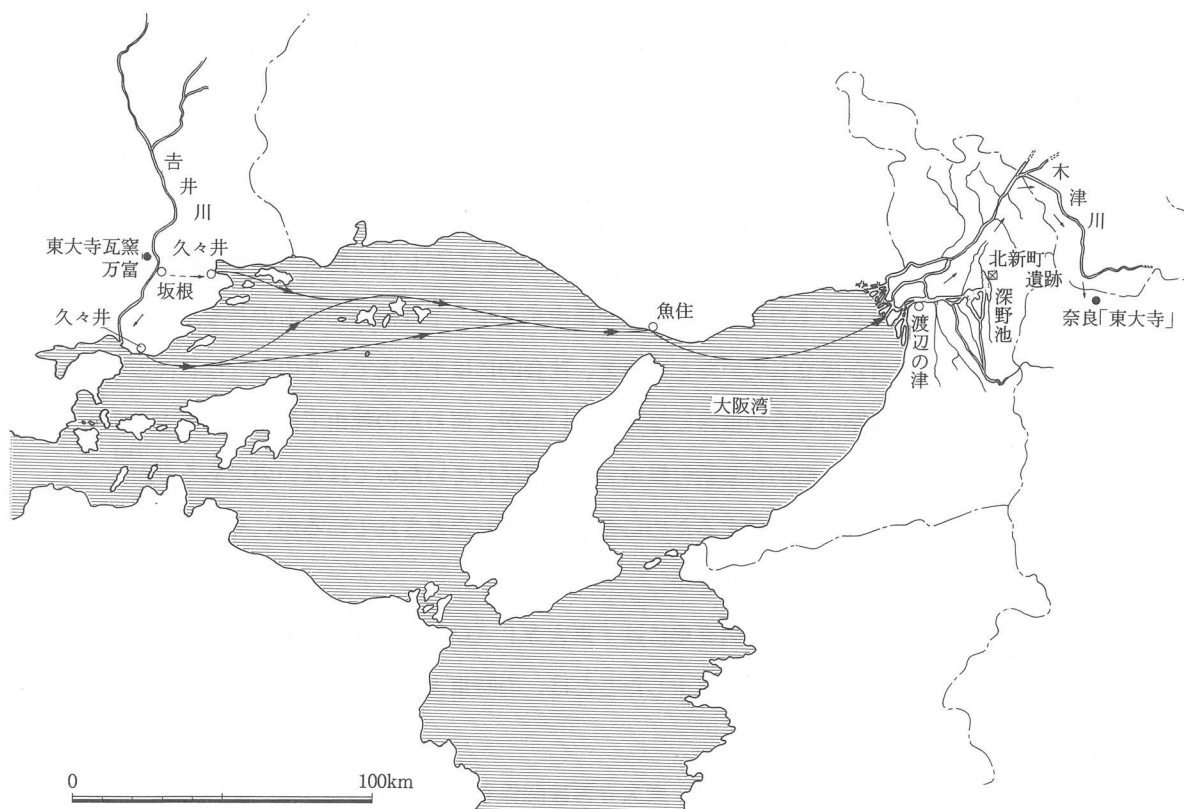
第92図 東大寺瓦採集地点

(13)
瓦の数は莫大な量になり、現在万富で確認されている13基の瓦窯では到底生産がおぼつかなく、出土地の(3)~(7)、(12)(13)などに見られるように、指定区域外、或いは周辺に瓦窯が存在していたことが推測されている。

8. 瓦の運搬

万富で焼かれた瓦がどのようにして東大寺まで運ばれたのであろうか。大量の瓦を運ぶには、人員や技術の問題もあるが、何よりも瓦を円滑に運ぶ安全な経路が確保されていなければならない。既に重源は、造営料国である周防国より切り出された材木を瀬戸内海の舟運を利用して奈良まで運んでおり、万富の瓦も同じ経路によって運ばれたものと考えられる。

では東大寺まで瓦を運んだ経路をたどってみよう。瓦窯のある万富は瀬戸内海から約20kmの内陸部に所在する。瓦窯のすぐ東側には吉井川が南流しており、瓦は吉井川を船で下って瀬戸内海まで運ばれたと考えられている。出土地(1)(2)のように吉井川内から瓦が出土するのは、運搬途中で船から落ちたものとされている。瀬戸内海まで運ばれた瓦は海船に積み替えられ、海路大阪を目指した。この瓦を積み替えた港は久々井であったと考えられているが、現在備前市と岡山市に同地名が存在し、積み替えを行なった港については二説がある。備前市の久々井港まで瓦を運ぶには、吉井川を下り備前市坂根あたりで一旦荷揚げ



第93図 東大寺瓦搬送ルート

をして、陸路を久々井まで運んだものとされている。これに対して岡山市の久々井に至るにはさらに吉井川を下ることになるが、舟運だけで運ぶことができ、大量の瓦を運ぶには陸路を利用するよりも効率が良いと考えられ、出土地⁽¹⁰⁾などはこの経路が利用されていたことを示す有力な資料となっている。いずれにせよ久々井を出航した船は海路大阪へ向かうが、途中播磨国に魚住泊があり、作善集には重源が魚住泊を改修した記事があるので、大阪へ向かう途中に停泊地として利用されていたのであろう。当時大阪の港の中心となっていたのは、淀川河口付近にあった渡辺津であった。現在の天満橋付近がその地であり、ここもまた重源に縁の深い場所⁽¹⁴⁾であった。ここまで運ばれた瓦は再び川船に積み替えられ、淀川・木津川を遡り木津を目指したものと考えられる。瓦は木津まで行き、そこで陸揚げされて、東大寺まで運ばれたものと考えられる。東大寺までは直線でおよそ6 kmの行程である。

9. 北新町遺跡の位置付け

このように東大寺まで瓦の輸送は、瀬戸内海から淀川の水運を利用した経路が考えられているが、それでは北新町遺跡で東大寺瓦が出土した理由は何であろうか。

北新町遺跡は河内平野の北東部に位置し、当時は深野池が遺跡のすぐ西方にあった。深野池は寝屋川を通じて西流し、渡辺津のあった淀川河口へ通じていたので、船によって北新町まで来ることは可能であったはずである。また、北新町からは清滝峠越えで木津に行くことができるが、この経路は他の大阪から奈良へ入るルートのなかでも比較的起伏の少ない道であり、瓦を運ぶには問題はなかったであろう。しかし瓦の輸送の主要経路は、淀川から木津へ向かうルートであり、北新町を経由するルートは補助的なものと考えられよう。当時は鎌倉幕府が成立していたとはいえ、社会的には不安定で、そのような状況の中で重源は瓦の輸送経路の安全の確保に努力していたが、何らかの理由で淀川を利用するルートが使えなくなり、一時的に北新町経由で瓦が運ばれていたのではないのであろうか。⁽¹⁵⁾

或いは、重源は東大寺を再建するために各地を勧進したとされているが、その勧進に協力した者に与えられたものであろうか。

いずれにせよ、北新町遺跡の調査地には「東大寺」（ひがしおおてら）という小字名が残っており、そこから東大寺瓦が出土したことは、当時東大寺との関連が深かったことは事実であろう。

表2 東大寺再建関係年表

1180年（治承4） 平重衡の南都攻めにより、東大寺、興福寺焼失。

- 1181年（治承5） 東大寺造仏、造寺長官に藤原行隆が任ぜられる。
重源、東大寺再建のため大勧進職に任ぜられる。
- 1183年（寿永2） 宋の仏工陳和卿、東大寺大仏の修補を始める。
- 1185年（文治1） 源頼朝、米1万石、砂金1千両、上絹1千疋を東大寺に寄進。
大仏開眼供養が行なわれる。
- 1186年（文治2） 重源、伊勢神宮に東大寺大仏殿造営を祈る。
- 1190年（建久1） 重源、東大寺を再建し棟上げが行なわれる。
- 1193年（建久4） 備前国、播磨国が東大寺、東寺の造営料国となる。
- 1199年（正治1） 東大寺南大門再建、法華堂（三月堂）改造。
- 1203年（建仁3） 運慶、快慶ら、東大寺仁王門金剛力士像を完成。
- 1206年（建永1） 重源没す。（86）
- 1567年（永禄10） 松永久秀、三好三人衆を東大寺付近で破る。大仏殿炎上。
- 1962年（元禄5） 東大寺大仏の修復を完了し、開眼供養が行なわれる。

註

- (1)『北新町言遺跡第3次発掘調査概要報告書』1997大東市北新町遺跡調査会
- (2)「治承の兵火」と呼ばれ、東大寺とともに興福寺も焼失しているが、興福寺は藤原氏の氏寺であったため、多くの領地や荘園が寄進され、その再建は早かった。
- (3)軒丸瓦は梵字の「𑖀（ア）」、軒平瓦は梵字の「𑖩（パン）」を中心に「東大寺大佛殿」の文字を配している。「𑖩（パン）」は大日如来（盧舎那仏）を表している。
- (4)昭和2年に指定されている。この他に鎌倉期の東大寺再建瓦窯には愛知県伊良湖東大寺瓦窯があり、こちらも国史跡に指定されている。伊良湖東大寺窯の瓦は軒丸・軒平瓦とも「東大寺大佛殿瓦」の文字を配し、「大佛殿」或るいは「東」の刻印がなされている。
『渥美半島埋蔵文化財調査報告』1966渥美町教育委員会（平成4年復刻版）
- (5)『泉瓦窯・万富東大寺瓦窯跡』1980岡山県教育委員会
- (6)(5)のなかで凸面のタタキメの文様は、7型式に分類されている。1. 斜格子文、2. 菱形文、3. 菱形文に横線を交点で交差させる、4. 3型にさらに縦線を交点で交差させる、5. 1型或いは2型を複線にする（2重のタタキメ）、6. 3型を複線にする、7. 縄目文があり、さらに0型としてタタキメを板状工具で削り消すものを挙げている。
- (7)(5)に同じ。刻印は平瓦の凹面に1個押されるのが普通であるが、なかには2個・3個押される例もある。また丸瓦の内面や平瓦の側端面に押されたものも報告されている。
- (8)3型。凹面の上縁部には、幅1cm程の鈍い金色の物質が帯状に付着しており、当初金泥かと思われたが、奈良国立文化財研究所において成分分析をしてもらったところ、その成分は黄銅鉱で、自然に付着した可能性が高いとのことであった。
- (9)4型。
- (10)5型。

- (11)松永・三好合戦により大仏殿が炎上する。その後元禄5年(1692)に徳川幕府により再建されている。
- (12)『国宝東大寺鐘桜修理工事報告書』1967奈良県教育委員会
- (13)一説には30万枚とも50万枚とも言われている。また元禄の大仏殿再建時には13万枚の瓦が使用されたとされており、昭和大修理ではその内約3万枚が再利用されたとのことである。
- (14)重源はこの渡辺の地に別所を建て、浄土堂の他倉庫や湯屋なども存在したと言われている。
- (15)瓦が陸揚げされたとされる木津周辺での出土が期待されるが、今のところ東大寺瓦の出土例はないようである。

参考文献

- 大山喬平「仏教の動向」『日本の歴史9 鎌倉幕府』1974掌握館
- 三浦圭一「経済生活の変化」『大阪府史第3巻(中世編I)』1979大阪府
- 『瀬戸町誌史料集』1985瀬戸町
- 矢部秋夫「東大寺再建と瀬戸町」『瀬戸町誌』1985瀬戸町